

# 究極のCPR モニタリング を求めて



## 演題 1

### 生理学的データに基づく最善のCPR —近赤外線組織酸素モニタへの期待—

演者 **石見 拓** 先生 京都大学 環境安全保健機構  
健康管理部門/附属健康科学センター 教授

## 演題 2

### NIROが変える蘇生医療の未来 —CPR生体反応性という概念—

演者 **鹿野 恒** 先生 札幌市立札幌病院救命救急センター 医長

座長 **坂本 哲也** 先生 帝京大学医学部救急医学講座主任教授

日時 ▶ 2016年 **11月17日** (木)  
12:00 ~ 13:00

会場 ▶ **第8会場**  
グランドプリンスホテル新高輪  
国際館パミール 1階 暁光

共催 ▶ 第44回日本救急医学会総会・学術集会  
<http://www2.convention.co.jp/44jaam/>  
アイ・エム・アイ株式会社  
<http://www.imimed.co.jp>  
浜松ホトニクス株式会社  
<http://www.hamamatsu.com/jp/ja/>

【ランチョンセミナーは、整理券制です】  
整理券について

配布場所 ▶ グランドプリンスホテル新高輪  
国際館パミール 2階 整理券配布所

配布日時 ▶ セミナー当日 7:00 ~ 11:20

※ 整理券がなくなり次第、配布を終了いたします。  
※ 整理券は、セミナー開始直後に無効となります。



## 生理学的データに基づく最善のCPR

### －近赤外線組織酸素モニタへの期待－

演者 石見 拓先生 京都大学 環境安全保健機構  
健康管理部門/附属健康科学センター 教授

院外心停止の救命率及び社会復帰率は、救命の連鎖の改善に伴い、経年的に向上してきているが、目撃のある心原性院外心停止でさえ、10%程度と依然として非常に悪い。社会復帰率向上のために質の高い胸骨圧迫は不可欠な因子であるが、そもそもガイドラインで推奨される「質の高い胸骨圧迫」とは性別、体型などの患者背景に依らず一定であり、その均一化された目標が真に効果的かは不明である。近年、全心停止患者に均一ではなく、各患者の状態に合わせた心肺蘇生である「Physiologically guided resuscitation」の効果が期待されている。

これを施行するためにはリアルタイムに生理学的データの測定が可能なモニタが必要である。

近赤外線組織酸素モニタは非侵襲・連続的に脳の酸素化・血流を測定することができるとされ、生理学的データに基づく最善の心肺蘇生を実践するためのモニタとして期待されている。今後の近赤外線組織酸素モニタの心肺蘇生への活用の展望について述べる。

## NIROが変える蘇生医療の未来

### －CPR生体反応性という概念－

演者 鹿野 恒先生 札幌市立札幌病院救命救急センター 医長

1990年代より世界的に蘇生のガイドラインがほぼ統一され、5年毎にCPRアルゴリズムが更新されているが、胸骨圧迫や換気、除細動などの蘇生行為は、その対象となった症例の最終的な予後から、その有用性を評価しているのが現状である。したがって、多くのCPA患者には適切なアルゴリズムかもしれないが、目の前のCPRを受けているCPA患者にとって最良であるとは限らない。また、2015年版蘇生ガイドラインにおいても、今後の課題として、ROSCや良好な神経学的な転帰を伴う生存につながる蘇生行為を行うため、生理学的指標をモニタリングすることについての有効性を検討する研究が求められている。

私たちが蘇生の現場で用いている脳組織酸素飽和度(SctO<sub>2</sub>)測定機器であるNIRO(200NXおよびCCR1)は、SctO<sub>2</sub>のみならずHb pulsation表示機能を備え、CPRに対する患者の生体反応性をモニタリングし、それぞれの蘇生行為のその患者への効果を克明に評価する事が可能である。

これからの蘇生医療は、NIROを用いる事により、画一的な蘇生ではなく、CPA患者に対して最良かつcustomizeされたCPRを提供する事が可能となるであろう。